

# 神戸市外国語大学 学術情報リポジトリ

## On the Norms of Preterit Forms of 16-17 Century Ruthenian

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 1999-09-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡本, 崇男, Okamoto, Takao メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1626">https://kobe-cufs.repo.nii.ac.jp/records/1626</a>

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



# 16-17世紀南西ルシ文章語における 動詞過去形の規範について\*

岡 本 崇 男

## 1 は じ め に

16世紀南西ルシの言語文化における重要な出来事は、教会スラブ語の文法書が出版され、これをもとにして言語教育が行われるようになったことである。さらに、リトアニア大公国の事務言語を基礎にして発展した東スラブ文章語（「ルシ語」）の存在が強く意識されるようになり、教会スラブ語の文法記述にならって、この言語の規範記述が試みられるようになった。つまり、かつては事務言語、教会文献、年代記などの文献ジャンル別に言語規範が存在しており、それぞれが経験的に修得されるものであったのだが、16世紀末から17世紀初頭を境として、二種類の言語規範、すなわち教会スラブ語と「ルシ語」のそれに収斂し、これらが予め教えられるものとなるのである。

筆者はかつてベラルーシ年代記の一つである「バルクラボウ年代記」（17世紀末）の語形の綴を調査し、この年代記の書き手が少なくとも表記にかんしてはかなりの程度の規範意識を持っていると結論付けた [8: pp. 48-49]。従って、次の段階として、この年代記における形態変化、統語法、語彙などの運用上の基準についても分析を行うべきであるのだが、同時代に教会スラブ語と「ルシ語」の文法書が存在していた以上、先ずこれらに記述された言

---

\*本論文は平成10年度文部省科学研究費補助金による成果の一つである。（基盤研究(B)(1)、研究課題名「コンピュータ利用によるロシア文章語に関する文献学的研究」、課題番号10410108）

語規範と実際に年代記で実践された言語運用とを比較分析することが年代記の書き手の持つ規範意識を探る上で有効な方法ではないかと思われる。なぜならば、東スラブの年代記は世俗文献でありながら宗教的な内容のテキストが混在しており、「バルクラボウ年代記」も典型的な「ルシ語」の文献であるといわれながら [10: p. 38], 実際には宗教的な文脈で教会スラブ語が使われているのである。つまり、この年代記の書き手の規範意識を知るためには、教会スラブ語と「ルシ語」の規範がどのようなものであったのかを予め認識しておく必要がある。

本論文においては、形態変化のうち動詞過去形の規範に対象を限定して、16-17世紀の代表的な文法書にみられる記述を検討して行く。動詞過去形を対象として選んだのは、これが東スラブ文章語において歴史的な推移がもっとも著しい形態範疇の一つであり、また同時に教会スラブ語と「ルシ語」とを区別する形態上の特徴の一つであることに理由がある。

## 2 検討の対象となる文法書について

16世紀後半に南西ルシで文法書が書かれるようになったことは、この地域の言語文化史における大きな転換期が訪れたことを意味している。もっとも、この時期まで文法書が皆無であったというわけではなく、「聖イオアンネス・ダマスケーノスの八品詞について」などギリシャ語の文法書を教会スラブ語に翻訳したものがすでに存在していた。そして、16世紀になってラテン語の文法書の翻訳が流布するようになる。特に、後者には「ドナートゥスの文法」に代表される初学者のための参考書的な性格を持つ文法書が含まれている。本論文ではここに挙げた二つの文法書をスラブ語独自の特徴を考慮した文法書が登場する前段階に属する翻訳文法書として扱うことにする。<sup>(1)</sup>

次に、翻訳文法書から本格的なスラブ語文法へ移行するまでの過渡的な段

(1) それぞれの文法書の概要については [11] 参照。

階に位置付けられる文法書として「アデルフォテース (1591年)」(以下 ADL と略記)を取り上げる。これはギリシャ語の文法書であるが、原語の部分が削られてしまった先の二編の翻訳文法と違って、原則としてギリシャ語の説明文の前後に(部分的には対訳形式で)教会スラブ語訳が併記されている。また、ギリシャ語の範例の一部にはそれに対応する教会スラブ語の語形が記載されているので、この文法書はギリシャ語だけでなく教会スラブ語の文法書の役目も担っている。

そして、1596年に教会スラブ語の規範記述を目的としたラウレンチー・ジザニーの文法書(以下 ZIZGR と略記)、1619年にはメレーチィ・スモトリツキーの文法書(以下 SMOGR と略記)が相次いで印刷出版される。ZIZGR の登場が ADL の出版から 5 年しか経過していないことから、かなり短い期間にギリシャ語あるいはラテン語の文法書の単なる翻訳から対訳、そしてスラブ語独自の文法書の編纂へと移行したことがわかる。

やがて、17世紀半ばになると教会スラブ語の規範ではなく「ルシ語」の規範記述を試みたイヴァン・ウジェヴィチの文法書が著される。「ウジェヴィチの文法(1643, 1645年)」(以下 UZHGR と略記)はジーザニヤスモトリツキーのような当時の南西ルシを代表する著明な教養人ではなく、その経歴についてはほとんど何も知られていない無名の人物イヴァン・ウジェヴィチが異郷の地フランスで書き上げた文法書である。これは印刷されたものではなく、二種類の手稿がそれぞれパリの国立図書館(パリ本)と北フランスの都市アラスの市立図書館(アラス本)に保管されている<sup>(2)</sup>。すでにこれらのことから、この文法書が ZIZGR や SMOGR と違って17世紀南西ルシの言語文化には直接何も影響を与えていないことがわかる。それにもかかわらず、UZHGR が重要であると考えられる理由は、ウジェヴィチが教会スラブ語と「ルシ語」

(2) パリ本のタイトルは“Граматыка словенская през Иоанна Ужевича словянина, славной Академий Паризской в Теологии студента в Парижу. Року от нарожения Сына Божого 1643”, アラス本は“Граматыка словенская зложена и написана трудомъ и прилежанием Иоанна Ужевича словянина. Лѣта от нарожения сына божого 1645”である。

との文法的な違いを明確に意識した上で一貫して記述の中心を後者の言語に置いているという点にある。

ウジェヴィチにかんしてわかっている数少ない情報によれば、彼はバリ大学神学部に学ぶ以前にポーランドのクラクフ大学に在籍している [3: p. XIII] ので、彼はポーランド語とラテン語には堪能であったはずで、当然の教養としてカトリックの神学、文法学、修辞学などにも通じていたことは容易に想像できる。また、アラス本にはクロアチア風のグラゴール文字によるテキストも見られ、教会スラブ語にかんしてかなりの知識を持っていたと考えられる。したがって、この文法書はウジェヴィチのような南西ルシ出身の知識人が ZIZGR や SMOGR のような規範書にもとづく文法教育の恩恵を受けていた可能性のあることの証明となるという意味において重要なのである。

### 3 教会スラブ語の規範

#### 3.1 翻訳・対訳文法書における動詞過去形の規範

ADL は以下のようにギリシャ語動詞の六つの時制に対応する教会スラブ語の名称と範例を提示している（ギリシャ語 *τύπτω* 「打つ」と教会スラブ語 *бити / оубити* 「打つ」, [1: 1.62-62b])。

ギリシャ語		教会スラブ語	
時制の名称	例	時制の名称	例
<i>Ενεστώς</i>	<i>τύπτω</i>	Настоящее	бію <sup>(3)</sup>
<i>Παρατατικός</i>	<i>ἔτυπτον</i>	Мимошедшее	оубихъ
<i>Παραχείμενος</i>	<i>τέτυφα</i>	Протяжен'ное	биях
<i>Υπερουντέλιχος</i>	<i>ἔτετύφειν</i>	Пресъвершен'ное	біях
<i>Αόριστος</i>	<i>ἔτυφα</i>	Непредълное	бихъ
<i>Μέλλων</i>	<i>τύψω</i>	Будущее	оубію

(3) 原文では“убихъ”。

六つの時制のうち、最初と最後を除いたものが過去時制であり、ギリシャ語の未完了過去には“мимошедшее”，現在完了には“протяжен’ное”，過去完了には“пресъвершен’ное”，アオリストには“непредълное”という訳語が与えられている。しかし、мимошедшееの例として挙げられているのが完了体アオリスト形 оубихъで，протяжен’ноеの例が未完了体未完了過去形 биях であることから，[11: p. 60] で指摘されているように，これは誤りであって，本来逆であるべきである。

動詞の過去時制として四つの形を区別するのはギリシャ系文法書の伝統であって，ADL 以前から知られていた文法書の一つである「聖イオアンネス・ダマスケーノスの八品詞について」のある写本（[4: pp. 47-54] — 以下 DAMASK と略記）でもやはり過去時制（время предбывшее）として(1) протяженое，(2) непредълное，(3) надпредъляемое，(4) предлижимое の四種類があげられている。しかし，これらの時制に対応する教会スラブ語動詞は，(1)に対して“біяхъ”，(2)に対して“бихъ”があるのみで，他の二つの時制については該当する形がない<sup>(4)</sup>。つまり，ギリシャ語の未完了過去とアオリストに対応する形のみがあげられているのである。

一方，16世紀になって東スラブ世界に知られるようになった「ドーナートゥスの文法書」（[4: pp. 528-623] — 以下 DONAT と略記）は，ラテン語の文法書の教会スラブ語訳であるので，ギリシャ系文法書と違って三つの過去時制，すなわち perfectum, imperfectum, plusquamperfectum が設定されている。そして，これらの時制に対して(1)минувшее（または прошедшее）несвершеное（= imperfectum 「未完了過去」），(2)минувшее совершенное（= perfectum 「完了過去」），(3)минувшее пресвершенное（= plusquamperfectum 「大過去」）という名称が与えられた上で，ラテン語の四つの規則動詞（amo, doceo, lego, audio）と二つの不規則動詞（sum, volo）に対応する教会スラブ語動詞の活用形が提示されている。

(4) “двъ же прочіи языку не пріятнь” 「他の二つ（の時制）は言語に該当しない」 [4: p. 52]

過去時制がギリシャ語系文法書で四種類、ラテン語系文法書で三種類となるのは、これらの文法書が教会スラブ語本来の文法記述を目的として翻訳されたものでないことに原因がある。そして、ギリシャ語の四つの過去時制のうち教会スラブ語動詞が対応する時制を二つしか認めなかった DAMASK の記述に比べて、DONAT ではラテン語の三種類の過去時制全てに対応形が提示され、ADL でギリシャ語の過去時制全てに教会スラブ語動詞の活用形を対応させるに至ったことは、教会スラブ語動詞の形態と語彙の意味についての統一的な理解がまだ存在しなかったことを意味している。

また、実際に各時制に対応した教会スラブ語動詞の形を見ると、DAMASK で例示された二つの時制形は ADL の未完了過去とアオリストに一致しており、それぞれの時制の名称も同じである。しかし、DONAT の未完了過去形は規則動詞の場合、почтох, полюбих のように、「暫く」の意味を持つ接頭辞 по- の付いた「完了体動詞」であって [11: p. 48], 他の二つの文法書とは語形成上違ったものが示されている。一方、完了過去形は чтох, оучих, слышах 等で、ギリシャ語系文法書で例示されているアオリスト形と形態上一致しているが、люблю の場合だけは любих ではなく、始動の意味を持つ接頭辞の付いた возлюбих である。そして、DAMASK では「対応なし」とされていた大過去形については、DONAT で多回体の意味を持つ接尾辞 -а-, -ва-, -ива- によって語幹の拡大された любливах, читах, учивах, слыах が例示されているのにたいして、ADL ではやはり接尾辞 -а- が付加された біах があげられている。ただし、後者は接尾辞によって語幹が拡大された未完了過去形 біах に更に接尾辞を加えた人工的な形式である。

動詞過去時制の規範記述における ADL (および DAMASK) の最大の欠点は、ギリシャ語動詞のパラダイムに対して提示される教会スラブ語動詞が一人称単数形のみであるために、人称変化の全体像がわからないことである。文法の記述は主として現在時制・三人称でおこなわれるので、文法書のテキストから動詞過去時制の規範形を充分に知ることはできない。もちろん、教

会スラブ語で読み書きを实践する者にとっては、一人称単数形のみを手掛かりとして、残りの人称変化を類推することが可能かもしれないが、それぞれの時制に一般的な人称語尾の一覧も与えられていない状況で、このような類推ができるのは教会スラブ語にかなり通じた人物に限られている。

ところが、DONATでは三つの人称について単数と複数の変化が提示されているため、双数以外の過去形を知ることができる<sup>(5)</sup>。例として、“чту” (lego に対応) と “есмь” (sum に対応) の活用形をあげておく (表1 および表2)。

表1 : чту の過去形

		1 人称	2 人称	3 人称
未完了過去	単数	почтох	почел еси	почел ѿнь
	複数	почтохомъ	почтосте	почтоша
完了過去	単数	чтох	чель еси	чел ѿн
	複数	чтохомъ	чтосте	чтоша
大過去	単数	читах	читаше	читаль
	複数	читахом	читасте	читаху/читаша

表2 : есмь の過去形

		1 人称	2 人称	3 人称
未完了過去	単数	бѣх	был еси	был есть/был/бѣ
	複数	бѣхом	бѣсте	бѣша
完了過去	単数	бых	был еси	бысть
	複数	быхомъ	бысте	быша
大過去	単数	бѣх/бѣвах	бывал еси	бѣшеша
	複数	бѣвахом	бывасте	бѣваху

DONATで提示された動詞パラダイムの最大の特徴は、ギリシャ語系文法書で明らかにされることがなかった二人称と三人称の単数形が単一形ではなく быти の現在形と「l分詞」によって作られる複合形になっていることである。そして三人称単数では быти の現在形 “есть” が省略されることもあ

(5) 双数の変化形がないのは、ラテン語にこの範疇が存在しないからである。



る。初期のロシア教会スラブ語動詞の過去単一形の語尾は表3および表4の通りであり、本来は二人称単数形と三人称単数形の間に形態上の違いがなかった(アオリスト: чте, чте, 未完了過去: читаше, читаше)のであるが、この時期には複合形がすでに規範形と見なされているようになったことがわかる。

表3: アオリスト語尾

	1人称	2人称	3人称
単数	-(о)хъ	-е/-ѡ	-е/-ѡ
双数	-(о)хова	-(о)ста	-(о)ста
複数	-(о)хомъ	-(о)сте	-(о)ша

表4: 未完了過去語尾

	1人称	2人称	3人称
単数	-хъ	-ше	-ше
双数	-хова	-ста	-ста
複数	-хомъ	-сте	-ху

おそらく人称の区別を明確にしようとする意志が働いていることが複合形導入の理由であると考えられるが、DONATに例示されたパラダイムからその人称区別の方法を分類したものが表5である。つまり、二人称単数が複合形で三人称単数が「I分詞」となることがかなり一般的であり、これらを組み合わせたbのタイプが典型的であるものの、人称を区別する方法が完全に統一されているわけではない。

表5: 二人称単数と三人称単数の区別の方法

	二人称単数	三人称単数	例
a	「I分詞」+ еси	「I分詞」+ есть	услышал еси / услышал есть, был еси / был есть
b	「I分詞」+ еси	「I分詞」のみ	учил еси / учил, чел еси / чел, слышал еси / слышал, слышал еси / слышал, был еси был, хотъл еси / хотъл, хачивал еси / хачивал
c	「I分詞」+ еси	単一形	был еси / бѣ, был еси / бысть, бывал еси / бѣше
d	単一形	「I分詞」のみ	любиваше / любивалъ, читаше / читал, учиваше / учивалъ
e	「I分詞」のみ	「I分詞」のみ	возлюбил ты / возлюбил, ты учивал / учивал

三人称複数形の二種類の語尾 *-ша* と *-ху* の区別が曖昧になっている傾向も見られる。本来 *-ша* はアオリスト (OCS. *-šę*), *-ху* は未完了過去 (OCS. *-хр*) の語尾であったのだが (表 3 および表 4 参照), *учаху* / *учиша*, *читаху* / *читаша* のように二つの本来異なる形式が大過去形として併記されている。ロシア教会スラブ語の未完了過去語尾 *-ста* (双数二人称・三人称), *-сте* (複数二人称) は、古教会スラブ語では *-šeta*, *-šete* であったが、既に最古の文献である「オストロミール福音書 (1056-57年)」においても *искааста* (双 3. OCS. *iskaašeta*), *бѣаста* (双 3. OCS. *běašete*), *помышляасте* (複 2. OCS. *pomyšljašete*), *течааста* (双 3. OCS. *tečašete*) というようにアオリストと同じ語尾が使われている。従って、二人称単数・複数と三人称複数以外の語尾についてはアオリストと未完了過去の区別がなくなった。そして更に未完了過去形の語幹母音に縮約が生じたため (*aa > a*, *ja > я*), かなりの数の動詞は先にあげた三つの人称以外でアオリストと未完了過去が同じ形式となってしまう (*искахъ* (アオ・単 1), *искаахъ* (未完了・単 1) > *искахъ*, *глаголасте* (アオ・複 2), *глаголашете* (未完・複 2) > *глаголасте*)。その上, 二人称および三人称の単数形が「I 分詞」を使った複合形で代用されるとなると, 未完了過去形とアオリスト形の形式上の区別はもはや意味を持ち得ず, 三人称複数語尾 *-ша/-ху* も同義的なものと扱わざるを得なかったのではないかと思われる。なお, DONAT には一例のみではあるが大過去三人称複数形として「I 分詞」のみの形 *хачивали* が挙げられている。

結局, DAMASK では範例の少なさのためにはっきりとわからなかったことであるが, DONAT では(a)過去の一回の行為を表す形と(b)多回体とが対になって過去時制のパラダイムを形成することが明確になっている。また, (a)に接頭辞を付加することによって別の過去時制が作られる。そして, ADL に至って(b)の接尾辞派生形がまた新たな過去時制を形成するのである。

### 3.2 ジーザニイの文法書

時制の名称。ZizGR では ADL と全く同じ名称(すなわち, *мимошедшее, протяженное, просвершенное, непредѣльное*) が使用されているのであるが, 例示された動詞の形を比較すると, *мимошедшее* と *непредѣльное* の形式上の区別が明確になっている。ADL では *мимошедшее* が不完了体であれば接頭辞の付いた完了体が *непредѣльное* になり (*творих — сотворих, вопих — возпих*), *мимошедшее* が完了体であれば *непредѣльное* にも同じ形をあてる (*позлатих — позлатих, положих — положих, поставих — поставих, дах — дах*) のが原則となっているのにたいし, ZizGR では一回の行為を意味する二種類の形をそれぞれの時制に割り当てているのである。すなわち, *мимошедшее* が接頭辞のない一回動詞であれば, *непредѣльное* は接頭辞の付いた完了体 (*гласих — въз'гласихъ*), *мимошедшее* が完了体であれば, *непредѣльное* がない。

また, ZizGR ではそれぞれの時制の関係が簡単に定義されている。これによれば, 動詞には先ず (1) *настоящее* (現在), (2) *протяженное* (継続過去), (3) *боудоущее* (未来) の三つの基本的な時制があり, 更にそれぞれから (1') *мимошедшее* (経過去)<sup>(6)</sup>, (2') *пресвершенное* (大過去), (3') *непредѣльное* (不定過去) が「生み出される」(“из них же и иная три раждаются”) となっている [6: p. 53]。

**過去形のパラダイム。** 完了体と不完了体のペアによって動詞のパラダイムを形成する例としてあげられているのは *явити/являти, спасти/спасати, вѣстати/вѣставати* である。これらにおいては完了体現在形が未来時制となり, 不完了体現在が現在時制となる。そして, 「不定過去」が存在しないので過去時制は三種類となる (例として *вѣстати/вѣставати* の過去時制を表 6 に示す)。

(6) *мимошедшее* はラテン語の *praeteritum* に呼応する過去時制の総称としても使われていたようなので, たんに「過去」と訳してもよいのであるが, 他の名称と区別するために「経過去」とした。なお, この訳語は [11] による。

表 6 : встати/въстати の過去形

		1 人称	2 人称	3 人称
経 過 去	単数	въстах	въсталъ (ла, ло) еси	въста
	双数	въстаховъ (ва)	въстаста	въстаста
	複数	въстахом	въстасте	въсташа
継 続 過 去	単数	въстах	въсталъ (ла, ло) еси	въсталъ / въсташа
	双数	въстаховъ (ва)	въстаста	въстаста
	複数	въстахом	въстасте	въстахоу (ша)
大 過 去	単数	въстаах	...	
	双数	въстааховъ	...	
	複数	въстаахомъ	...	

「不定過去」は гласити/глашати と быти に例が見られる。前者の場合、接頭辞の付いた完了体の一人称単数形 въз'гласихъ のみが例示されている。後者は直説法以外では бывати の変化形が組み込まれているが、過去形では語幹 бы- (бя-) を持つ形が「経過去」および「継続過去」として一つの変化表を形成し、語幹 бы- を持つ形が「不定過去」の変化とみなされている。

ZizGR においても DONAT と同じように二人称単数は複合形 (「I 分詞」+ еси) である。しかし、単一形も併記されている例があり (яви, являше, являше; спасе, спасаше; быше), この範疇において単一形が完全に消滅したとは言い切れない。また、三人称単数は DONAT と違って「経過去」では単一形が一般的であり、「継続過去」と「大過去」では「I 分詞」と単一形が併記されている。なお、不完了体でありながら「経過去」を形成する гласити だけは、三人称単数が гласил である。また、三人称複数の語尾の混同も ZizGR においては、多回動詞に固有の時制である「継続過去」と「大過去」に特徴的な現象として規範化されている。

### 3.3 スモトリツキーの文法書

時制の名称。SMOGR でも мимощедшее と непредѣльное は過去時制の名称として使用されているが、протяженное と пресовершенство が廃されて、

新たに прешедшее と преходящее が導入された。それぞれの時制の定義は Z1ZGR 以上に詳しい。すなわち、(1)「未完了過去」(преходящее)は「完了されなかった過去の能・受動行為」(“несовершенно прешлое дѣйство или страданіе”)を意味するもの、(2)「完了過去」(прешедшее)は「完了された過去の能・受動行為」(“совершенно прешлое дѣйство или страданіе”)を意味するもの、(3)「大過去」(мимошедшее)は「より以前に完了された過去の能・受動行為」(“древле совершенно прешедшее дѣйство или страданіе”)を意味するもの、(4)「不定過去」(непредѣльное)は「すぐに完了された過去の能・受動行為」(“вмалѣсовершенно прешлое дѣйство или страданіе”)を意味するものと定義されている。

過去形のパラダイム。SMOGR の動詞規範記述の大きな特徴の一つは、時制と派生形との関係が定式化されたことにある。すなわち、図 1 および図 2 に示すように接頭辞や接尾辞で語幹が拡大されていない動詞を「初原体」(первообразный видъ)あるいは「完全体」(совершенный видъ)とし、<sup>(7)</sup>この現在形を出発点として接頭辞、接尾辞、過去語尾が接続されることで現在・過去・未来の各時制形が形成される体系が提示されている。

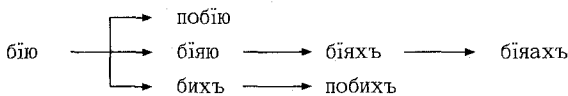


図 1：完全動詞および多回動詞

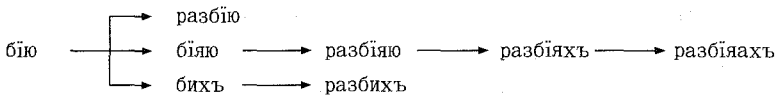


図 2：複合動詞

(7) 訳語は [11] による。ここでいう「体」(видъ)は現代ロシア語文法における同じ名称の動詞範疇(すなわち「アスペクト」)とは違って、語形成レベルの用語であることに注意しなければならない。

そして、派生と時制の関係は図3のようになる。

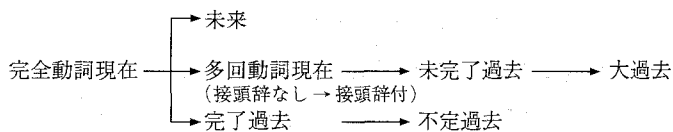


図3：形態派生と時制の関係

そして、形態派生と時制とのこのような関係を前提とした上でスモトリツキーが提示した動詞過去形のパラダイムが表7(честь)と表8(творить)である。

SMoGR 過去形規範の特徴は、(1) 二人称単数が「I分詞」のみ、(2) 多回

表7：SMoGRの動詞過去形(1)

		1人称	2人称	3人称
完了過去	単数	чтохъ	чель (чла, чло)	че
	双数	чтохова/-въ	чоста/-стъ	чтста/-стъ
	複数	чтохомъ	чосте	чтоша
未完了過去	単数	читах	читаль (-ла, -ло)	читаше
	双数	читахова/-въ	читаста/-стъ	читаста/-стъ
	複数	читахом	читасте	читаху/-ша
大過去	単数	читаах	читааль (-ла, -ло)	читааше
	双数	читаахова/-въ	читааста/-стъ	читааста/-стъ
	複数	читаахом	читаасте	читааху/-ша
不定過去	単数	прочтохъ	прочель (-ла, -ло)	проче
	双数	прчтохова/-въ	прчтоста/-стъ	прчтоста/-стъ
	複数	прчтохомъ	прчтосте	прчтоша

表8：SMoGRの動詞過去形(2)

		1人称	2人称	3人称
完了過去	単数	творих	творил (-ла, -ло)	твори
	双数	творихова/-въ	твориста/-стъ	твориста/-стъ
	複数	творихом	твористе	твориша
未完了過去		творяхъ ...		
大過去		творяхъ ...		
不定過去	単数	сотворих	сотворихл (-ла, -ло)	сотвори
	双数	сотворихова/-въ	сотвориста/-стъ	сотвориста/-стъ
	複数	сотворихом	сотвористе	сотвориша

動詞の時制である未完了過去と大過去の三人称複数語尾に二種類ある、(3) 大過去は接尾辞 *-a-* によって語幹が拡大されている、(4) 単一形のうち双数の全人称と三人称複数の語尾に性の区別があることなどである。<sup>(8)</sup> これらのうち、(2) は ZIZGR および翻訳文法にも見ることができる。(3) の人工的な大過去形についても ZIZGR の記述を継承したと考えられる。しかし、(1) については助動詞の *еси* が一貫して変化表から欠落している点で ZIZGR とは基本的な違いがある。これを直説法以外のパラダイムには *еси* が存在するのだから、ここでは単に省略されていると考えるべきなのか [2: p. 22], あるいは意識的に助動詞が除外されていると見るべきなのかについて判断するに十分な根拠を知らない。ただし、スモトリツキーの「ルシ語」規範 (第 4. 1 節) との対比は示唆的である。なお、(4) の単一形の語尾に性の区別 (男性・非男性) を認めるとするのは、東スラブの教会スラブ語の伝統にはなかったものである。<sup>(9)</sup>

### 3. 4 ウジェヴィチの文法書

UZHGR は「スラブ語文法」と銘打ってはいるものの、記述の中心は「ルシ語」に置かれている。このため教会スラブ語 (“*lingua sacra*”) にかんする規範記述は稀にしか見ることができず、二つの手稿のうちアラス本にのみ動詞のパラダイムが提示されている。<sup>(10)</sup> 動詞の時制は (1) *praesens* (現在), (2) *praeteritum* (過去), (3) *futurum* (未来) の三つであるが、ZIZGR および SMOGR と違って、UZHGR では動詞の過去時制は「未完了過去, 完了過去, 大過去」 (“*Praeteritum imperfectum, perfectum et plusquamperfectum*”)

(8) 三人称複数語尾 *-ша* は古いキリル文字では男性が *-ША*, 非男性が *-ША* となる。

(9) ZIZGR でも双数一人称語尾には *-ова/-овъ* の二種類が併記されている。

(10) バリ本では “*Porro Sacra lingua Sclavonica praeteritum effer(i)t per ахъ, ut писахъ scripsi(,) читахъ legi, глаголахъ dixi*” 「更に、スラブの神聖語は過去時制を *ахъ* によって伝える。例えば, *писахъ* (わたしは) 書いた, *читахъ* (わたしは) 読んだ, *глаголахъ* (わたしは) 言った」と簡単に一人称単数形の例をあげるにとどまっている [3: バリ 44]。なお、ほぼ同じ記述がアラス本にも見られる (“*Porro Sacra Lingua Sclauonica praeteritum format per ахъ ut писахъ scripsi(,) глаголахъ dixi(,)*” [3: アラス 70]。

という表題のもとに一種類の人称変化 (глаголати) が示されているにすぎない (表9)。

表9: UZHGR の動詞過去形

	1人称	2人称	3人称
単数	глаголахъ	глаголаль/а еси	глагола
双数	глаголаховъ	глаголаста	—
複数	глаголахомъ	глаголасте	глаголаша/глаголаху

UZHGR においてもやはり二人称単数は「I分詞+еси」であり、この形態範疇について複合形が定着していることが確認できる。また、三人称単数は SMOGR と同じ単一形 (アオリスト) のみで、単独のあるいは助動詞 *есть* を伴う「I分詞」は例として示されていない。そして、三人称複数は不完了体動詞に特有の *-ша / -ху* の両形併記となっている。未来時制に不完了未来 (“*futurum primum*”: буду глаголати,...)<sup>(11)</sup>と完了未来 (“*futurum secundum*”: —возглаголю,...)の二種類を認められている以上、ウジェヴィチも完了体と不完了体の意味の違いは意識していたと思われるが、三人称単数をアオリスト形のみとし、三人称複数にアオリスト形と未完了過去形を併記するのは ZIZGR と SMOGR と異なる規範意識であるといえる<sup>(12)</sup>。人工的な多回形 глаголахъ, глаголаль еси,... が既存の文法書から引き継がれていないのは、完了過去・未完了過去・大過去の形式上の区別を認めない著者のこうした個人的な意識によるのか、あるいは経験上そのような形に出会ったことがなかったからであろう。

#### 4 「ルシ語」の動詞過去形規範

「ルシ語」の動詞過去形に関する規範記述は SMOGR および UZHGR に見

(11) бытиの未来形と不定詞で複合未来形を形成することは教会スラブ語に特徴的ではない。おそらく、「ルシ語」から類推した結果であると思われる。

(12) DONATに同様の例が見られる。



ることができる。もっとも前者は教会スラブ語の文法書であるので動詞過去形については表10に示す簡単なパラダイムが提示されているにすぎない。一方、後者においてはすでに第3.4節で述べたように「ルシ語」の規範記述に重点が置かれているのでかなり詳しく説明されている。

#### 4.1 スモトリツキーの文法書

SMOGR では過去時制に教会スラブ語と同じ下位区分があるものと考えられている。そして過去形が原則として単一形で表される教会スラブ語に対して、「ルシ語」ではそれぞれの時制の教会スラブ語形と同一の語幹を持つ「1分詞」と *быти* の現在形によって作られる複合過去形が規範となる。従って、二人称単数については実質的に教会スラブ語との区別がないということになるのだが、教会スラブ語のパラダイムで助動詞の *еси* が一貫して欠落しているのは、「ルシ語」の体系との違いを意識的に際立たせるためであったのかもしれない。

表10：スモトリツキーのパラダイム

		1人称	2人称	3人称
完了過去	単数	цель есмь	цель (чла, чло) еси	цель есть
	双数	чла есва / чль ествь	чла еста / чль ествь	—
	複数	чли есмы	чли есте	чли суть
未完了過去		читааль есмь...		
大過去		читааль есмь...		
不定過去		прочель есмь...		

ところで、*читааль есмь* のような人工的な過去語幹を持った過去形を含めたパラダイムが提示されているにもかかわらず、スモトリツキー自身はこれらの過去形を現実にあまり使用しなかったことが Stefan M. Pugh の研究によってあきらかになっている。Pugh はスモトリツキーの「ルシ語」による主要な著作に見られる言語特徴を分析した結果、これらの複合過去形が聖書の文脈にしか現れず、また三人称では助動詞を伴わないと指摘している

のである [9: p. 264]。つまり、スモトリツキーが記述した過去形の規範は神聖な内容を表現するための高尚な文体のものであるかもしれず、このことによって文法書全体の性格も規定されていると考えるべきであろう。

#### 4.2 ウジェヴィチの文法書

UZHGR においては過去時制の下位区分がない。つまり、ここでも時制体系に教会スラブ語と「ルシ語」との違いを認めない SMOGR と同じ立場が取られているということができる。

過去形に関してはかなり詳しい記述があるが、二つの写本間で記述内容が多少異なっている。例えば、アラス本では「過去形には単数で性の区別があり」(“Praeteritum imperfectum, perfectum et plusquamperfectum difformiter singulariter”), 「複数では性の区別がない」(“pluraliter uniformiter”) とされているが、パリ本では複数にも性の区別がある。また、アラス本には双数がないが、パリ本には双数がある(表11と表12を参照)。

表11: ウジェヴィチ (アラス本) のパラダイム

		1 人称	2 人称	3 人称
単数	男性	ковалемъ	ковалесь	коваль
	女性	коваламъ	ковалась	ковала
	中性	коваломъ	ковалось	ковало
複数	全性	ковалисмы	ковалисте	ковали

表12: ウジェヴィチ (パリ本) のパラダイム

		1 人称	2 人称	3 人称
単数	男性	панувалемъ, -ехъ	панувалесь	пануваль
	女性	пануваламъ, -ахъ	панувалась	панувала
	中性	пануваломъ, -охъ	панувалось	панувало
双数	全性	панувалахва	пануваласта	—
複数	男性	панувалихмы	панувалисте	панували
	女・中性	панувалыхмы	панувалысте	панувалы

ここに提示されている過去形はウジェヴィチ自身が説明しているように、一人称と二人称では *быти* の現在形に起源を持つ要素が「1分詞」に接続され、三人称は「1分詞」のみという、構造上ポーランド語と同じ (“*Praeteritum Polonicum cum Rhutenis habent simile*” [3: アラス70], “*Praeteritum Polonicum cum Ruthenis habent idem*” [3: パリ44a]) 過去形である。従って、接続要素の *-емь*, *-есть*, *-исмы*, … は性と数を識別する語尾と見なして差し支えない。ところが、この語尾についてもアラス本とパリ本の間には違いが存在している。すなわち、パリ本には一人称単数において *-емь*, *-амь*, *-омь* の異形態として *-ехь*, *-ахь*, *-охь* が併記され、一人称複数ではアラス本の *-исмы* にパリ本の *-ихмы*, *-ыхмы* が対立している。一人称にのみ *-ехь*, *-ихмы* 等の別形があることも16-17世紀のポーランド語と共通した現象のようである<sup>(13)</sup>。また、アラス本には *писавемь* [3: アラス70], パリ本には *писавъемь* および *писавемь* [3: パリ44a] のような別形の存在も指摘されており、ウジェヴィチ自身の中に過去形にかんする規範意識の動揺が見られなくもない。ちなみに、スモトリツキーが実際の文筆活動において採用した過去形はアラス本に近い体系になっている [9: p. 261]<sup>(14)</sup>。

## 5 結論に代えて

南西ルシにおいて16世紀末から17世紀前半までの間に、古典語文法の翻訳からスラブ語本来の体系記述を目指した文法書の出現へと言語規範の記述方法に急速な展開が見られたこと背景には、そのような本格的な文法書に対する社会の需要があったと考えられる。つまり、与えられた文献を読むだけ

(13) ポーランド語の *-ch-* を含む別形語尾 (*-ech*, *-ychmy*, *-ychwa* 等) は、15世紀から16世紀への移行期に現われた小ポーランド (中心都市はクラクフ) およびシレジアに特有の方言形で、これらの地域の出身者が16世紀のポーランド文章語に持ち込んだようである。ただし、これらの語尾は17世紀に国家の中心がワルシャワに移ったことを契機として廃れてしまった [5: pp. 303-304]。

(14) スモトリツキーには三人称複数に男性語尾 *-ли* と非男性語尾 *-лы* の区別がある。

でなく、自ら書くために言語を学習する社会の成員が確実に増加していたのである。しかし、ZIZGR や SMOGR が印刷出版され、特に SMOGR に複数の版が存在しているとはいえ、これらの文法書が実際にどれほどの影響力を持っていたかについては、同時代およびそれ以降の個々の文献に見られる規範意識と文法書に書かれた規範とを比較分析してみなければわからない。その際、考慮して置かなければならないことは、規範書の性格と、規範記述の対象となる言語の地域性である。

規範書の記述対象の言語が教会スラブ語であっても「ルシ語」であっても、その規範書の性格を考慮せずに、個々の文献に現れた言語事実を評価するための基準として使用することはできない。例えば、ZIZGR も SMOGR も教会スラブ語と文法学の教育を目的として著されたものである。そして、いずれの文法書にも、すでに5世紀以上の伝統を有するロシア教会スラブ語の実践に反する動詞過去形が規範として処方されている。こうした例は規則の体系記述としての文法書の整合性を重視した編纂者の「主張」と考えるべきである。この点に限っていえば UZHGR は、教会スラブ語の例が極端に少ないものの、おそらく実践に即した規範提示を行っていると思われる<sup>(15)</sup>。また、「ルシ語」についても SMOGR は高い文体を志向していると考えられ、一方 UZHGR は過去形の形式が現実には不安定であるという状況に直面したが、最終的に一応の解決を示した。

16-17世紀当時、東スラブ全域（「大ロシア」および「小ロシア」）だけでなく、セルビアやブルガリアなども含めた広い地域の共通語と考えられていた教会スラブ語と違って、「ルシ語」の規範記述については、それが実際に南西ルシのどの地域の言語実践を背景にしているのかについて確実な答えを出せないことが大きな問題となる。例えば、UZHGR に記述された「ルシ語」が実際に使用されていた地域を特定することはできない。「古ベラルーシ語

(15) 格変化について UZHGR では造格と処格（前置格）を区別せずに奪格（*ablativus*）とし、二種類の変形を併記しているため、ここでは現実を意識しながらもラテン語文法の影響から脱却していない。

文法」の著者 A・A・ヤスケーヴィチは「残念なことに I・ウジェヴィチとその業績についてわれわれはほとんど何も知らない」[12: p. 51] と言っておきながら、当然のごとくに「ベラルーシ人の著者イヴァン・ウジェヴィチの『スラブ語文法』」[12: p. 51] に記述されているのが「古ベラルーシ語」[12: p. 51], 「当時のベラルーシ語」[12: p. 62] であると明言している。一方、ウクライナで出版された [3] に含まれている論文『イヴァン・ウジェヴィチとその文法』では、ウジェヴィチが例示した過去形の別形（正則形 писалемъ に対する писавъемъ, писавемъ）を根拠にして彼が南西ウクライナの出身ではないか [3: p. XX] とやや具体性のある見解を述べてはいるが、やはり「イヴァン・ウジェヴィチの著作は、この言語すなわち 16-17 世紀のウクライナ固有のいわゆる標準文章語の文法構造を広範囲にわたって—伝統的な文語や学術文献の言語特徴から民衆が話す俗語にいたるまでの特徴を一記述した」[3: p. XXVI] と結論付けている。しかし、当時の南西ルシにおいては「ベラルーシ人」「ウクライナ人」という意識がまだなかったため、実際に著者自身は「スラブ人」と自称しているのが現実なのである（脚注（2）参照）。

#### 参考文献

- [1] ADELPHOTES: *Die erste gedruckte griechisch-kirchenslavische Grammatik. L'viv—Lemberg 1591.* (hrsg. von Olexa Horbatsch, 2., um das Faksimile erweiterte Auflage). München. 1988.
- [2] HORBATSCH, O., *Die vier Ausgaben der kirchenslavischen Grammatik von M. Smotrićkyj.* Wiesbaden. 1964.
- [3] ИВАН УЖЕВИЧ, *Грамматика слов'янська I. Ужєвича.* Київ, 1970.
- [4] JAGIĆ, V., *Codex slovenicus rerum grammaticarum (Рассуждения южнославянской и русской старины о церковнославянском языке).* München, 1968 (СПб., 1896).
- [5] KLEMENSIEWICZ, Z., *Historia języka polskiego.* Warszawa. 1976.
- [6] LAVRENTIJ, ZIZANIJ, *Hrammatika slovenska. Wilna. 1596.* Frankfurt

- a. M., 1980.
- [ 7 ] МЕЛЕТИЙ СМОТРИЦКИЙ, *Грамматика*. Київ, 1979.
- [ 8 ] 岡本崇男, 「『バルクラボウ年代記』における表記の規範意識について」. 神戸外大論叢第48巻第3号. 1997.
- [ 9 ] PUGH, S. M., *Testament to Ruthenian: A Linguistic Analysis of the Smotryc'kyj Variant*. Cambridge, Massachusetts, 1996.
- [10] СУПРУН, А. Е., *Введение в славянскую филологию*. Минск. 1989.
- [11] 山口巖, *ロシア中世文法史*. 名古屋, 1991.
- [12] ЯСКЕВИЧ, А. А., *Старабеларускія граматыкі*. Мінск, 1996.